



教科書の裏に書かれた未来

大田区立蓮沼中学校 三年 小椋 香穂

新年度、新しい教科書が配られた。私は自分の名前を書くために、記入欄のある裏面に目を向けた。するとそこには、「この教科書は、税金によって無償で支給されています。」と記されていた。あれ？こっちも。こっちの教科書も。なんと、その日配られた教科書のほとんどが税金で支給されていたのだ。

「税金」その言葉は、どこか自分とは遠い存在だと思っていた。大人が決めることであり、自分が払う税金をちゃんと考えなければいけないのはもっと先の話だから、子どもの自分には関係ない、と。しかし、税金は、自分が生まれたときから払っているし、この先もずっと払っていくと知った。思いのほか、税金は身近な存在だった。

それをきっかけに、税金についてさらに調べてみた。もし税金がなかったら、道路や橋、信号は整備されず、消防車も救急車も来ない。公立学校の生徒1人当たり年間教育費約百万円も、各家庭が自己負担することになる。

たとえば、救急車が来ないとどうなるか。夏休みが始まり、猛暑による体調不良者のニュースをよく耳にする。総務省の報道資料によると、

令和六年の救急出動件数は、およそ七百七十一万七千件に達した。税金がなければ、これらすべての搬送に治療費や受診料が掛かり、払えない人は病院に行けない。そうならば、救えるはずの命が失われてしまうかもしれない。そもそも、お金を稼ぐことが難しい救急や警察などの仕事は税金がないと存在しないかもしれない。

このように、税金には大きな意義があることがわかった。しかし、学生のうちから税金についてよく知っている人は少ないと思う。これからの日本を担う若い世代が、我が国の政治や経済に関心をもたなくてよいのだろうか。いや、もつべきである。

税金についてよく知っている学生は少ない。そのため、税金に関する教育をもっと活発にしたり、自分で主体的に学ぶことで、認知度を高めることができると思う。また、社会保険労務士、税理士、簿記などの税金の勉強ができる資格を取得することを目指すのもよいと思う。

税金によって私たちの生活は支えられている。私たちはこのことに感謝しなければならぬ。私たちはまだ子供であるが、「税金は大人が決めることだから」「まだよく知らなくても大丈夫」そうではない。関心をもつこと。関心をもち続けること。これこそが、未来の納税者としてのあるべき姿ではないだろうか。